校長室の窓から

数少なしは意味深し ―「成熟脳」のお話―

（「心深し」とも言います。）

黒川伊保子著『成熟脳』が面白かったです。黒川作品、最近では『妻のトリセツ』が一番売れている。この本、本校のＹ田先生も、Ｗ邊先生に勧められて読まれたよう。私は、Ｙ田先生の成果と課題を確かめてから、妻に隠れてこっそり読もうと思っています。

ところで、２１世紀は脳の世紀と言う人もいるくらい脳に関する学問の進歩が目覚ましいようです。黒川さんは医者や学者ではないけれど、ＡＩの研究開発をしておられたことから、隣接する学問である脳科学とか神経科学にも造詣が深い方。

そんな黒川伊保子著『成熟脳』によると、人間の脳の成熟年齢は５６歳らしい。・・・意外と遅い。

脳は７年のまとまりごとに段階的に成長し、さらに、２８年ごとに大きくステージが変わる。２８歳が入力系（記憶）のピークで、以後は出力系（判断・表現）に変わる。そこから２８年後の５６歳が出力系のピークで、皆、何らかの「達人」になる。（言い逃れ達人とか、悲観主義達人というのもありらしい。となると、達人というのは「人格の固定化」か。）そしてその後、熟成しながら１１２歳まで進化するという。

出力系が充実する５０代は、多様な選択肢の中から、瞬時に「最適解」が導ける。（あくまでも黒川説・・・瞬時に見つけた最適解は、あくまでもその人にとってのの最適解ですから。）

年齢とともに物忘れが多くなるのは、「瞬時に最適解を導く」ための神経経路の整理。正しい答えを素早く出すために、必要のないものは捨てて、最適解への経路を通りやすくする。だから、女優の名前が出てこないのは気にしなくていい。だけど、家に帰って目の前の妻の名前が出てこなかったら病院に行きなさいとのこと。

６０代から７０代の脳は迷いがなく、本質を看破し、真理が体感できる。まだるっこしい説明抜きに、一言で本質を言い当てる。だから、「四の五の言わずに、６０代の勘には従え。」と黒川さんは言い切る。さらに、そんな脳の特性から、６０代から７０代は、旅とお稽古ごとの時代。なんとも、楽しそう。

ところで、私のお稽古ごと（華道）でのこと。

ある日の稽古で、葉がついた枝を数本入れたところ、後ろから師匠が、

「葉を捌（さば）きましょう。」

（いらない枝・葉・花・蕾を切り落として整理することを「捌（さば）く」といいます。）

「はい。（失敗したら、代わりあったっけ・・・ないし。）」

挙動不審でビビりながら葉を捌いて生ける。

次に、自分なりに捌いた撫子を入れたところで、また師匠が、

「捌いて。」

（もっと落とすって・・・そんな、無理！）

「ビビりなのでできません！」と私。と、間髪いれず。

「ビビりはいけません。捌いて。」

（問答無用ですか・・・まあ、そうでしょうけど。）

手にじんわりと汗をかきながら落としていく・・・。

その日の稽古終わりに師匠が、

「久村さんは、お花を愛しておられるから、落とすのがためらわれるのですね。」

（いや先生、久村はただのビビりです。）

「数少なしは意味深し。少ないからこそ意味が深まるのがいけばなです。」

と、ひとつ口伝をいただきました。

調べてみると、存在しない枝や花を、あたかも在るかのように見せる生け方まであるらしい。

脳の出力性能最大期は８４歳。そしてその後、「カーテンが開く」ように瑞々しくゆるぎない９０代の脳が待っているそうです。なんでも、右脳と左脳をつなぐ脳梁が９０代で若返るという所見があるらしい。そんなふうに脳を成熟させて、次の境地に到達するには、「長く生きることしかない。（黒川氏）」。

勘が冴えわたる６０代・７０代の脳で「旅とお稽古ごと」を楽しみ、熟成が極まる８０代・９０代の脳で、「数少なしは意味深し。」の境地をどう表現できるか。自ら確かめてみたくなりました。